

# 埋文センターニュース

津市埋蔵文化財センター

第12号

2000.11.1



接合にチャレンジ 埋蔵文化財出張講座

## 学校へ行こう！ ～埋蔵文化財出張講座の試み～

埋文センターでは、昨年から小学校6年生を対象に埋蔵文化財を素材にした出張講座を実施しています。これは、休日を利用した参加者公募型の講座ではなく、平日、小学校にセンター職員が出向いて教室で講座を開くものです。学校の教室でクラス単位に講座を実施するにあたっては学校現場との連携が不可欠であり、結果的には従来の学校教育と社会教育の垣根を越えたスタイルとなりました。

一般的に、歴史講座や体験発掘をはじめとする埋蔵文化財関連の普及活動は博物館の普及業務の一環として行われる傾向にあり、発掘調査と研究整理を主な業務とする埋蔵文化財センターの普及業務としては、現地説明会の開催や調査概要の刊行が行われてきた程度です。しかし、発掘調査の出土品である土器や石器は通常、センターの収蔵庫で保管されており、普及活動に用いる「生きた教材」の宝庫が埋蔵文化財センターであるといっても過言ではありません。歴史系博物館を持っていない津市において、こうした生きた教材を生かす手段こそが出張講座の実施であり、センター独自の普及業務と考えました。

講座の開催にあたっては、小学校ごとに全く違った内容では問題があるため、基本項目を設定し、かつ各学校区の地域の特徴を反映した内容を組み入れ展開することにしました。

講座内容の特徴は、以下の4点です。

- ① 地域に密着した内容とする
- ② 地域に対する興味の喚起を主眼とする
- ③ 本物の出土品を用いて実施する
- ④ 出土品に実際に触る体験を重視する

具体的には、まず学校区内の遺跡・史跡のスライドを投影し導入としています。通学路沿いや自宅近くにありながら、普段はあまり意識しない遺跡・史跡と子どもたちとの距離を縮めることがここでのねらいです。次に、発掘調査と埋文センターの仕事の様子をまとめたビデオを鑑賞して遺跡調査の実際に触れてもらいます。2時限の講座時間の前半は主に視覚に訴える内容を中心に進みます。

後半は、遺跡から出土した遺物を用いての内容となります。基本的には学校区の遺跡からの出土品を教室に搬入し、子どもたちに手に取ってもらいます。接合資料が多く破損の危険性もありますが、その分子どもたちの遺物の扱い方も自然に慎重になっています。講座での破損は今までありません。子どもたちは、土器や石器を手に取りながらその用途を考えます。中世陶器碗でご飯を食べるまねをし、管玉ネックレスを首から下げてブレスレットとセットでお洒落を楽しんでいます。本物の出土品に触れ、その感触を体感できること。そこがこの講座の本領と考えています。



自分の手で壺を持ってみる



管玉でオシャレ

最後は、ジグソーパズルの要領で破片遺物の接合に挑戦します。必ずしも全てが接合できる訳ではありません。10人ほどでひとつのグループを作り、接合できた個数を競うゲーム的な要素も取り入れていることもあり、お互いに声を掛け合って協力して取り組んでいます。遺物と戯れる時間は速く流れるのか、もっと続けてやりたいとの声も挙がります。

講座で興味を持った子どもたちの中には、

後日センターを訪れる子もいます。こうした子どもたちは再度接合に取り組み、拓本に挑戦するなど、センターの一角は放課後の遊び場になります。わたしたちも、こうした興味が次へのステップと考へ、講座後のフォローアップの必要性を感じています。また、今年は9校で実施したこの講座、将来的には市内の小学6年生全員が、一度は埋蔵文化財に触れる機会になればと考えています。(中村)

## 寄贈資料の紹介

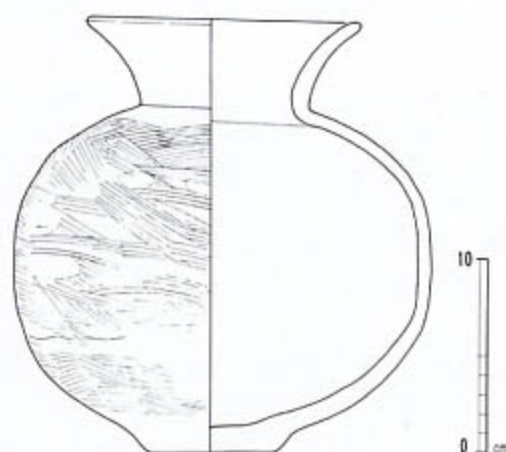
大里窪田町の宇田武弘さんからこの度寄贈された考古資料(弥生土器)を紹介します。

寄贈されたのは、平底で丸い体部と外反する口縁部をもち、体部外面に粗いハケ調整が施される弥生時代後期末頃(約1,800年前)の壺です。高さ22.4cm、最大径は21.6cmです。

この土器は、今から約35年ほど前、毛無川右岸の田圃で麦作の溝を掘る際に出土したとのことです。川のすぐ上手には、<sup>ろくたい</sup>六次B遺跡や<sup>はしがいと</sup>橋垣内遺跡などの大きな遺跡があつて、この壺が出土した場所も遺跡の一角と考えられます。壺はほとんど損傷を受けておらずほぼ完形です。遺構に伴うか否か判断できないので、壺がどのように使われていたか不明ですが、ちなみに、この壺の頸部まで水を入れてみたところ3.6<sup>もみ</sup>入り、<sup>もみ</sup>籾でおよそ1升8合(3,200cc)入りました。太古の人々は、この壺に一体何を入れていたのでしょうか。

今回は、出土時から長い間大切に保管してこられた宇田さんのご厚意で、郷土の貴重な歴史資料を公表することができました。

このように寄贈いただいた資料は、地域史の調査研究の資料としてだけではなく、埋蔵文化財センターに展示するなどして普及活動の資料としても大いに活用していきたいと考えています。(中村)



出土地位置図 (1:10,000)



実測図 (1:4) と写真

窯を使って土器を焼く技術は、古墳時代の中期（5世紀）に日本に伝わり、まず大阪の陶邑窯<sup>すえむらやう</sup>で定着し、その後各地に伝播していきます。県内では100基余りの窯跡が知られていて、特に河芸町から鈴鹿市にかけて広がる徳居窯<sup>とくすえやう</sup>は40基近くからなる県内最大の窯跡群として有名です。

津市内では、県内最古の久居窯<sup>ひさいやう</sup>に近い半田<sup>ふじたにやう</sup>の藤谷窯<sup>ふじたにやう</sup>で主に埴輪を焼いていたことが分かっています。一方、北部ではヲノ坪窯<sup>つぼやう</sup>、山室窯<sup>やまむろ</sup>が知られていましたが、最近新たに高野尾でも窯跡が確認されました。藤谷窯については、「埋文センターニュース」第10号で紹介しているので、今回はそれ以外の窯について、また同じ志登茂川水系に属する安濃町・芸濃町の窯も合わせて紹介したいと思います。

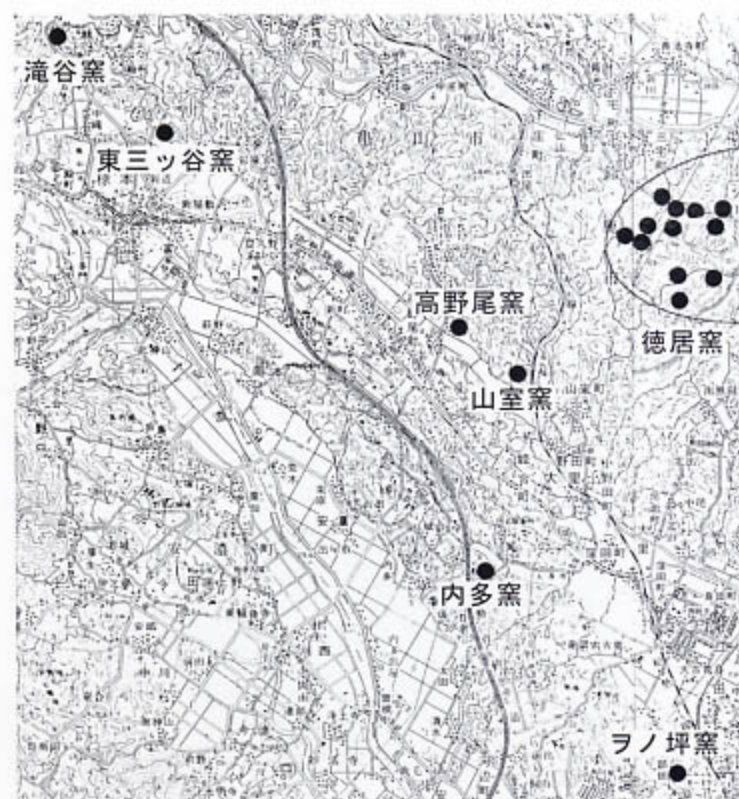
ヲノ坪窯（津市一身田上津部田） 平成8年に発掘調査された窯で、窯体は不明ですが

灰原の一部が確認され、須恵器と埴輪が出土しています。6世紀初めの窯と考えられます。

内多窯<sup>うちだやう</sup>（安濃町内多） 土取りによって消滅していますが、郷土史家の鈴木敏雄氏の調査メモによると、窯は3基あったと記されています。6世紀初め頃の須恵器・埴輪と7世紀代の須恵器が出土していますが、出土した窯の特定はできません。

#### 山室窯（津市大里山室町・大里野田町）

鈴木敏雄氏の『大里村考古誌考』によって初めて報告され、幅約1.4m高さ約1.0mの窯体の断面写真が紹介されています。残念ながらこの窯は消滅したと思われませんが、この他に現在でも、灰原の一部と考えられる遺物の散布地が少なくとも2箇所あり、さらに西側にある中池の北岸で3基の窯体断面が確認できます。須恵器はほぼ同時期のもので、6世紀前半の窯と考えられます。



窯跡分布図 (1:100,000)



山室窯分布図 (1:8,000)



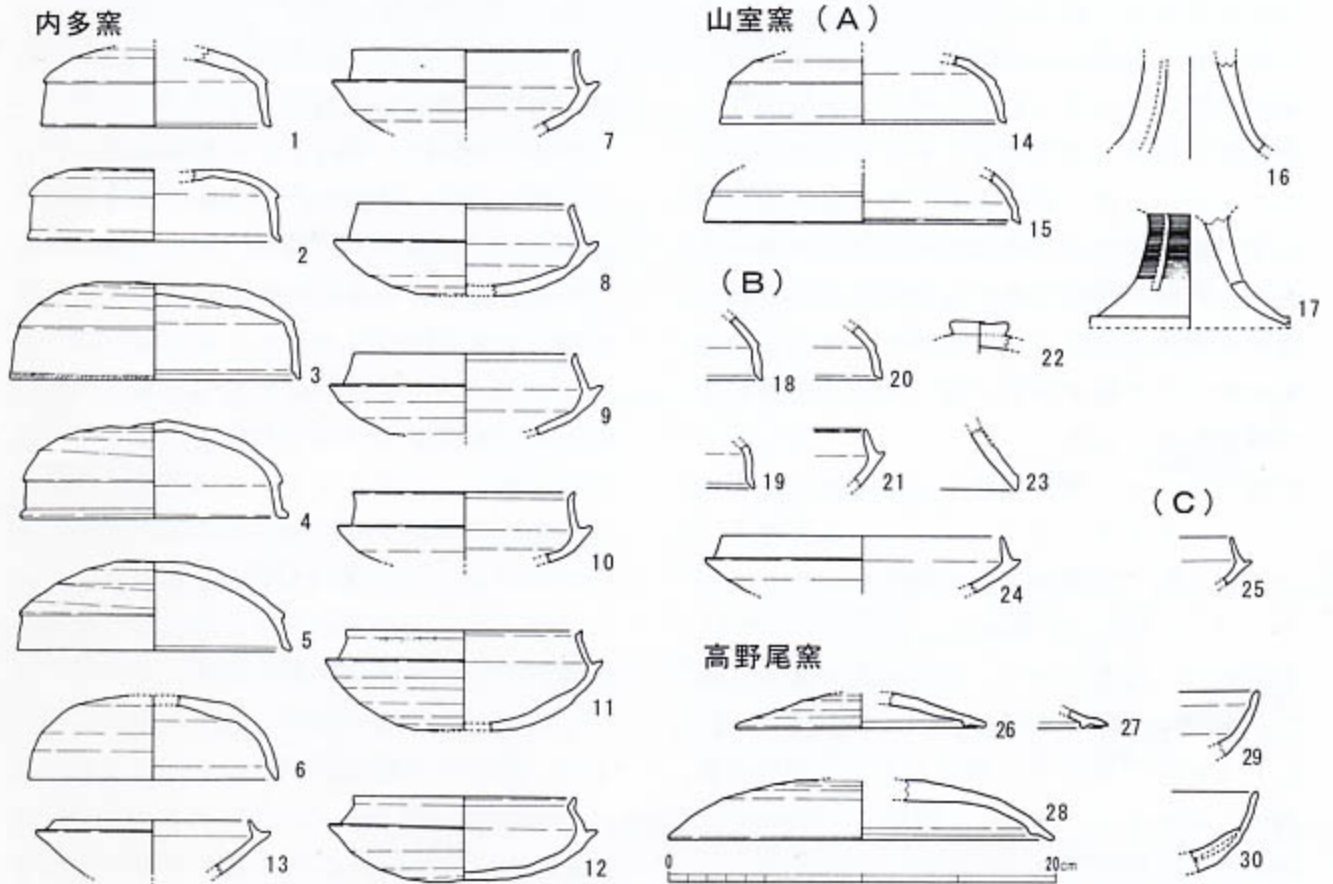
山室窯遠景 (南から)

たかの およう  
**高野尾窯** (津市高野尾町) 山室窯の北西約1kmにあり、丘陵の南斜面に灰原の一部が露出しています。遺物には須恵器蓋杯・甕などが確認でき、蓋杯は口縁部の内面に返りのある蓋と椀形の杯からなり、7世紀でも後半の窯と考えられます。

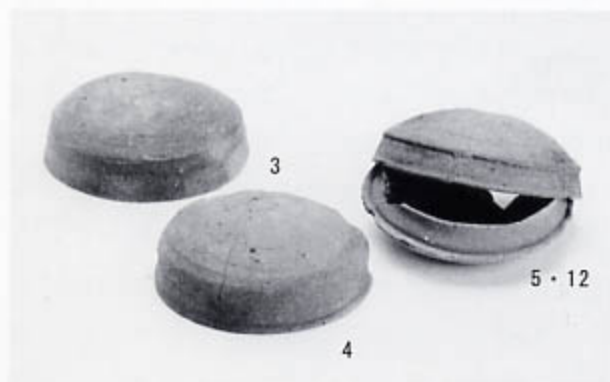
ひがしみつたによ  
**東三ツ谷窯** (芸濃町棕本) 以前は小谷の北斜面に2基の窯体が露出していたようですが、現在では下草が繁茂して確認できません。付近では須恵器が採集されていますが、時期は

不明です。この他、林集落北西の丘陵に滝谷窯がありましたが、土取りによって消滅して詳細は不明です。

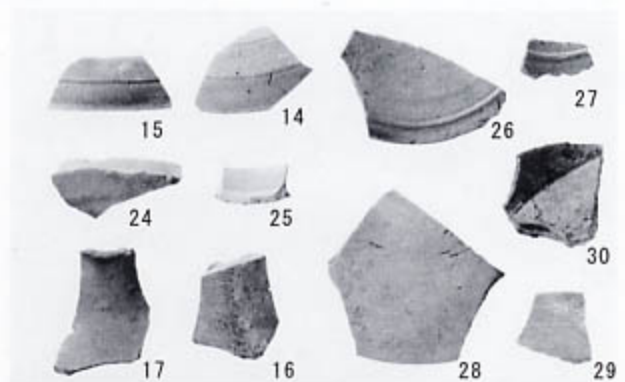
このように志登茂川流域には、全域に渡って疎らに窯跡が分布していて、6世紀初めに操業が開始され、7世紀代にも断続的に窯が築かれていることが分かります。また、旧奄芸郡に相当する地域は、徳居窯などを含め窯が比較的集中していて、古代の窯業生産を考える上で注目される地域の一つです。(米山)



窯跡出土遺物実測図 (1:4)



内多窯出土遺物



山室窯・高野尾窯出土遺物

## 遺物紹介⑪ 睦合中世墓群の出土遺物

今回は津市大里睦合町字青の睦合中世墓群から出土した遺物を紹介します。

睦合中世墓群は、市の北部を流れる志登茂川中流の右岸段丘に位置します。遺跡の南側を伊勢別街道が通っていて、すぐ東はかつての窪田宿（大里窪田町）です。また、窪田地区は、鎌倉時代から戦国時代に窪田庄があったことでも知られています。

睦合中世墓群は、昭和52年に団地造成工事で偶然発見された遺跡ですが、遺跡周辺の畑地は、地元では土岐塚という塚が多くあったと古くから言い伝えられてきた場所だそうです。教育委員会に遺跡発見の連絡が入ったのが、遺跡が破壊された後だったので、残念ながら遺構のことは全くわかりませんが、骨を納めていた壺や甕が9個、一石五輪塔が1個採集されました。

鎌倉時代から戦国時代につくられた墓を総じて中世墓と言いますが、一口に中世墓といっても、その埋葬場所や埋葬形態には様々なタイプがあります。例えば山の中にあったり、集落の近くにあったり、河原にあったり、また、単に穴を掘って埋めただけの墓もあれば、盛り土をするものや、たくさんの石で覆ったものもあります。さらに土葬や火葬もあって、実に多種多様です。

例えば、市内の中世墓では、平成10年に



睦合中世墓群位置図 (1:15,000)

雲出島貫遺跡から鏡や櫛を納めた漆箱や、青磁・白磁の碗や皿などを副葬した土坑墓が発掘され、たいへん話題となりました。また、睦合中世墓群のような骨を納めた壺や甕が出土した例には、埋文センターニュース第5号で紹介した坂本山中世墓群（片田志袋町）があります。

さて、睦合中世墓群はいつ頃の墓なのでしょう。その重要な手がかりを握る壺や甕などを観察してみましょう。

睦合中世墓群から出土した壺や甕は、形などの特徴から、愛知県内で生産されたものであることがわかっています。

1～5は、ざらりとした肌触り、口が大きく開いた安定感のあるどっしりとした形をしています。これらは14世紀後半から15世紀前半に常滑地方でつくられていた甕です。これらをよく見ると、1と2には花の、4には松葉のスタンプが押されています。

これに対し、6～9は灰釉陶器といわれるもので、表面に釉薬がかかっている、体部には横方向の細い線が何条も刻まれています。7には注ぎ口の痕があり、元は水注でした。8は、薄緑色の釉薬がかかっている、線で大きな花模様が描かれています。これらは13世紀末から14世紀ごろに瀬戸地方で生産されていたものです。

また、10の一石五輪塔は、その名の通りひとつの石に五輪塔が彫り込んであります。中世の絵巻物を見ると、墓の上に五輪塔や卒塔婆などが描かれたりしています。

出土遺物から睦合中世墓群は13世紀から15世紀に造営されたものと推察されます。そのころ睦合中世墓群の周辺には、荘園があり、すぐ近くには街道が通っていました。果たして睦合中世墓群には、どんな人たちが葬られていたのでしょうか。（藤田）





睦合中世墓群から出土した遺物

《編集後記》

出張講座や遠足の見学は4月、5月に集中する傾向にありますが、今年度は10月にも1校うかがうことになりました。

秋からは、位田遺跡や雲出島貫遺跡で発掘調査が開始されます。次号では、これらの現場情報もお届けできると思います。(藤)

発行日：2000.11.1

編集・発行：津市埋蔵文化財センター  
〒514-0058

三重県津市安東町1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

印刷：エポック印刷